

平成26年度 第2回磐田市子ども・子育て会議 会議録

開催日時 : 平成26年6月17日(火) 13:30~15:20
出席者 : 委員11名 欠席2名
事務局 : 11名

1. 開会

2. 発達支援に関する概要説明

発達支援に関する概要について、事務局より説明。

発達支援センターはあとセンター長より、現状説明。

<質疑応答>

委員: 幼児健診を受けていない人の中に発達障がいの人が隠れているかもしれない。資料の30%というのは、健診を受けた人に対して30%ということであると思う。健診を受けていない人はどれくらいいるのか。

事務局: 例年では、1歳6か月児健診の受診率は95~97%、3歳児健診の受診率は、1歳6か月児健診の受診率より若干低くなっている。

委員: 受けていない人へのアプローチは?

事務局: 4月に国から、心配のある子どもに対しての現状をどれくらい把握ができているかという調査が来ており調査中である。磐田市ではだいたい100%確認できている。一部外国人などは帰国してしまっているということがある。これからも定期的に把握をしていきたい。

事務局: 昨年度の1歳6か月児健診の受診率は97.9%、3歳児健診の受診率は98.9%。未受診の方にはハガキで受診勧奨を行う。それでも来ない方には家庭訪問を行っている。外国人の方となかなかコンタクトが取れず100%になるのは難しいが、日本人の方であればほぼ100%近く状況は掴めている現状である。

委員: 発達支援を要する原因として、元々の脳障がいであるのと、虐待が原因であるということも言われているが、その割合は把握しているか。

事務局: そちらの方は把握は難しい現状にある。掴めていないというよりは、掴むことが難しい。

委員: 自分子どもが通っている学校にも、発達支援を要する子ども達の教室がある。今後市としてはどのようにしていこうと考えているのか。どういう姿を望んでいるのか。

みんな一緒に同じクラスでという話もあるだろうし、そうでない子が発達支援を要する子どもに引っ張られてしまうということもあると思う。どういう姿を目指しているのか、こういうことを注意して行っているということをお願いしたい。

事務局: 現状「こういうことを理想としてここへ向かっている」ということは検討中であるが、インクルーシブ教育というのが近年言われており、近い将来それも考えていかなければならない。現実にインクルーシブ教育をしていくためには様々な課題があると思うので、教育

部とともに、特別支援連携協議会などで検討をしていき、一番望ましい方向性と、それをやっていくために必要な課題や施策を検討していかなければならないと思っている。

3. 意見交換

- (1) 予防・早期発見のために保護者ができること
- (2) 行政に期待すること

2 グループに分かれグループワークを実施、グループごと発表。

<Aグループ>

- (1) 予防・早期発見のために保護者ができること
 - ・ 当たり前のことを知らない親が多い。30%の中に親の愛情不足の子どもがいるのではないかと。
 - ・ 親自身が子ども時代に同世代としか遊んでいなかったことが原因で、遊びの発展性がなく子どもと関わるのが上手くできないのでは。
 - ・ 健診などで、親子の自由遊びの中で親子の関わり合いをチェックする機会を設ける。
 - ・ 子どもが「見て」と何度も言うのはなぜか? →もっと同じ時間を共有したいのでは。
 - ・ 親は自分が遊ぶことには長けているが、肉体的にエネルギーを使うことが少なく、もっと肉体的なエネルギーを使っていれば心理的なエネルギーを使わずに済む。
- (2) 行政に期待すること
 - ・ 自由遊びのチェックシートを作成して親子関係を見直す。
 - ・ 親が、近所にいる子どもの年齢に近い人と関わるような小さなコミュニティの場を増やす。

<Bグループ>

- (1) 予防・早期発見のために保護者ができること
 - ・ 保護者ができることをここでアウトプットして、何をしたいのかよく分からない。そもそも、発達障がい「発見する」という考えはどうか?
 - ・ 孤立した子育てや母子カプセルが虐待や発達障がいに繋がってしまうのではないかと。
 - ・ 子どもを受け入れてあげる、認めてあげる。
- (2) 行政に期待すること
 - ・ 子どもをかわいいと感じられなかったり子どもへのサポートが薄い親をサポートする。
 - ・ 発達支援が必要な子どもだけを取り上げるのではなく、多様な人達が暮らしていく中でその人達全体がうまく育って暮らしていけるようにしていきたい。
 - ・ 健診の際に相談できる場があるという情報を発信する。
 - ・ メールサービスの配信。
 - ・ 親としてはいきなり行政に電話をすることに対して敷居が高いと感じるのでメールで相

談できたり、通話料がかかってしまうことで躊躇することもあると思うので無料通話アプリを利用するなど、いくつかの手段を使う。

<質疑応答・意見交換>

- 事務局：先ほど「小さなコミュニティ」とあったが、具体的にどれくらいの小ささなのか？
- 委員：グループワークで話が出たのは、今の人はコミュニケーション能力が足りないので、まずは同じ趣味・趣向を持った人達でグループを作って話ができたらその後にもう少し大きなコミュニティに繋がっていけば、というイメージだった。
- 事務局：例えば子育ての事ではなく、好きな音楽が同じなどでもいいということ？
- 委員：好きな音楽でも、絵を描くことや、手芸が好きな親子さんどうぞ、というのでも良いと思う。
- 委員：自分の所でやっていることが3つある。1つ目はベビーマッサージ、2つ目はエクササイズのようなヨガ、3つ目はおじいさんおばあさんが来て昔話をしてくれたり昔の遊びを教えてくれる会。いずれの会もかなり人が集まってくるし、そこに来た人達はそれを求めて来ているため話がかかり共通しているので、終わってから残って話しているということが多い。テーマを決めて集まる場では趣味・趣向が合うので友達が作りやすいと思う。
- 委員：それを色々な幼稚園や保育園で行おうと思ってるらっしゃると思うので、それを行政が後押ししてくれると良い。
- 委員：ヨガは初めて聞いたが面白いし良いと思う。ベビーマッサージや伝承遊びは各支援センターでも行っている。
- 委員：ヨガの良い所は、赤ちゃんを連れていると動きにくいとか、他の人に迷惑がかかると思っているが、みんな子連れで来ているので、赤ちゃんを抱っこして踊ったり、赤ちゃん達を寝かせてみんなでやるということで、お互い様で気兼ねなく、思い切りできやすい所だと思う。お母さん達は体を思い切り動かして発散する機会がないので、ものすごく人気がある。
- 委員：私は支援センターほのぼのので、奇数月にママとエクササイズという講座を行っている。申込者が多く人気がある。
- 委員：自分には6歳と4歳の子がいるが、子どもが赤ちゃんの時にエクササイズも伝承遊びも参加していた。きっかけは、乳幼児健診の時に支援センターがあることを知り、支援センターに行って知り合いになった人からエクササイズや伝承遊びがあることを知って参加をするようになった。その後子どもが小学校に入学した時に、そこで知り合った人に再会したことで、幼稚園・保育園での親のグループで分かれてしまうことが多いが、グループ以外にも繋がりが広がった。
- 自分は子育て支援センターに一步踏み出せたので良かった。支援センターの先生が「子育て支援に来られる人はまだ良いが、一步が踏み出せない人に対してどうするかを考えなくてはならない」と言っていた。
- 自分が乳幼児健診に行った時には、すごく小さなグループで同じ月齢の子どもの親が30人

くらい。それでも「なるべく順番を早くしたい」とみんな早く来る。赤ちゃんの親だった時には30人でも「多いな」と感じた。子どももいるのでなかなか30人とは話せない。「小さなコミュニティ」はどれくらいかという話がでていたが、自分は乳幼児の時は30人の中の3人くらいのグループの方が話しやすいのではないかと思う。今の世代の人はそれくらい小さい方が良いのではないかと思う。

委員：自分の所で行っている支援室では、初めて訪れる人には必ず自分が行って話をするようにしている。そうすると今おっしゃった通り、5～6人くらいのグループだと話ができないが、2～3人のグループだと多くの質問がきたりする。1対1だともっとすごい。小さくすればするほどみんな話をしてくれる。

事務局：親子の愛着感がキーワードだと思う。磐田市が今度新たに事業化しようとしていることがあるが、初めて子どもを持った親で、健診前の生後5か月くらいを対象にした親子が参加するベビープログラムを展開しようとしている。このベビープログラムは、ずっと行政が続けていくのではなく、そういう話ができるお母さん達を増やしていきたい。そのお母さん達が今度は地域やグループに入って行って、自分が学んだ子どもの成長や経験を伝えていくということに広がっていけば、良い姿になるのではないかと考えている。

委員：それはすごく良いことだと思うが、絶対言ってもらいたいことが1つある。0歳の時が全部勝負の時だと思う。授乳をしている母親の9割近くがスマートフォンや携帯電話を見ている。これでは栄養は与えられるかもしれないが、心の栄養は与えられない。一番初めに取る親子のコミュニケーションを取れないのに、コミュニケーションの取れる子どもが育つわけがない。とにかく授乳している時には「おいしい？いっぱい飲んで大きくなってね。」などと赤ちゃんの顔を見て話しかけながらすること。それをするだけでもものすごく違いがあると思う。とにかく目を合わさない子の親には「赤ちゃんの時にはお母さんの目を食い入るくらい見てきていましたよね？」と必ず話すようにしている。そうすると「え？そうですか？」という返事が返ってくる。すごく見られていたことに気が付いていない。見られていても見返さないで、結局目を合わさない子どもになってしまう。この事は必ず言って欲しい。

委員：現在、保健師が地区へ出て、赤ちゃん相談を行っている。全地域までにはなっていないかもしれないが、見付では隔月で行っていて、そこに積極的に参加してくれる人もいるし、保健師が新生児訪問で気になった方を誘ったりしていて、そこで友達関係を作る。やはり近くでお友達を作りたいというお母さんが多いので、地区ごとの赤ちゃん相談をもっと積極的にできれば、お母さん達の交流の場も広がってくるし、保健師からのアドバイスを聞くこともできるので、行政には力を入れていただきたい。

委員：ベビープログラムは、ぜひ男性にも行って欲しい。母親に押し付ける形では良くないので父親も。

委員：グループワークの時に妊婦の時のお母さんへの指導の話が出た。ベビープログラムの話はとても良いと思った。生後5か月まで、首がすわるまでは外に出ないことが多いので、産まれてからお母さんは子どもに対して「どうだろう？こうだろう？」とまっすぐな視線に

なると思う。視界が広がっている時はいつか考えると、先ほど委員がおっしゃっていた妊婦の時だと思う。楽しい事や不安な事いろいろな事を抱えているので、こういうプログラムがあって、実際産まれた時に「ああ、そうだ。」と思うことがあって、繋がっていると素敵だと思う。

委員：自分の妻が妊娠している時に、一緒に産婦人科で話を聞いたが、大人数で聞いていると聞き流してしまうし質問もしにくい。その病院1つしか知らないが「とりあえず教えました。」という感じがあった。自分はその話を聞いて立ち合いをやめた。その時もう少しあたたかいフォローがあったらと思うし、妻もそこであまり悩みが解消されたわけではなかった。あたたかいフォローがあるととても良い。妊娠中の方が、ほとんどの人が前向きになっていると思う。「産まれたらこうしてあげよう。」と考えていると思うので、その時に講座のようなものがあれば良いと思う。

4. 事務連絡

次回会議の開催は7月24日を予定。

5. 閉会